

---

# 空がいつもより広い日は

## 並盛りライス

---

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

空がいつもより広い日は

### 【著者名】

ZZマーク

### 【作者名】 並盛りライス

### 【あらすじ】

春に出会ったあの人のコトが忘れられなくて、空がいつもより広い日には、家を抜け出してあの場所に行く。

空がいつもより広い日は、オレンジ色の球体が雲の中に顔を隠して、入道雲が夜になつても見えるくらいに月の明るい土曜の午後。

投げた石ころが静止した水鏡に環を描いて広がるみたいに、思い出が浮かんでは消えていく日。

瞬きをしないように、必死で目を見開くのだけれど、やっぱり君の姿は見えない。

息遣いや、肌の温もりだけがあたしの部屋の片隅に残つてい。

気付いてしまつたら、気になつて眠れない。

いつもは、関心の外にある時計の音に変わつてあたしの心を刺していく。

ベットの左側で、背骨を丸めて眠れない夜を過ぐるのは酷く辛い。

だからそんな日は…空がいつもより広い日は、真夜中に家を抜け出す。

散歩がてらに、いつもの歩道橋を歩く。

うそみたいな静寂が広がつていて、時たま思い出したよつトラックのボウつとしたテールライトが通る。

灯りがついている家はまばらで、それでも無機質な街灯の光が明る

い。

空には、満月が360°のパノラマで世界を照らして、大きなモクモクとした入道雲が月を囲っている。

金網は少し湿つた夜風でひんやりと冷たい。あたしは足をブラブラとさせながら、首が痛くなるぐらに伸びをして空を見上げる。

電線が別ける空をはどこか狭くて、孤独に見えた。

自分を守るように領土を主張しているみたいで嫌だ。  
この歩道橋だけが唯一、そんな電線よりも高い所にあって、空は一つになる。

夜の空気は、人間の体温と、車の排気が混じつていなくて澄んでい  
るようを感じられる。

きっと、人間の一人もいない山奥にいくとこんな風に空気も清いの  
だわう。

町を見下ろすと、新しい家と、昔からある家がお互いを牽制しながら窮屈そうに囁きあつている。

田を見つけてみても、満月の残像が残つていて、その田の中にもぐく  
波紋を寄せていく。

出会ったのは春。

その冷めた目に魅せられて、実のらない恋と割りきった。

君は、いつでもあたしをギリギリまで期待させて、優しさによく似た残酷さで裏切る。

あたしが必死にすがりつくと、飽きたのか離れていく。

冬には、マンションとあたしの部屋に荷物を半分づつ残して失踪した。

置き手紙なんてなくて、合鍵は金魚の水槽に中途半端に沈んでいた。

友人や知人の伝で、仙台のどこかのバーで酔ったあげくに他人を殴つたらしい。

とか

アメリカで男の恋人と同棲しているとも聞いた。

確かめてみる気はないが、多分どちらも本当に、どちらでも関係なかつた。

最期まで、しっかりと関係を清算していないこと、話をする間もなく失踪したこと、あの合鍵と一緒に宙に浮いているみたいな感じだ。

まだ、あたしは待っている。

空が広い日にはボンヤリとでいいから用が出ていてほしいと願っている。

そろそろ用の海底にたどり着いても良い頃だけれども、まだ、手足

が動かなくなるまでは底は見ない」としている。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9293a/>

---

空がいつもより広い日は

2010年11月16日22時14分発行